

小児看護における看護師の感情労働
— 患児・家族への日常の看護場面を通して —
Feeling labor of a nurse in child care.

-From the every nursing scene to the sick child and the family daily life.-

東 4 階病棟　大曾契子・深澤聡恵
医療福祉支援センター　小竹美千穂

【要旨】

対人サービスの職種はすべて感情労働者であるといわれている。¹⁾ 小児看護における感情労働を明らかにするため、MSWIに依頼し看護師へのインタビューを行った。日常の看護ケアの中で親と患児から信頼を得られない・自分の看護ケアを否定され看護技術に自信が持てない等、感情労働は多く存在していた。その対処方法は周囲のスタッフの支えと、看護師が気持ちを切り替え相手の立場で考え、看護ケアを提供してゆくことであった。

【キーワード】　小児看護　感情労働　対処方法

I はじめに

A病院の小児科は小児慢性特定疾患の長期入院患児が大半を占めている。小児病棟配置が決まった時、経験の少ない小児看護に自信の無さを口にする看護師は多い。看護師の感情には患児・家族から向けられる感情が大きく影響する。患児に拒否されたり、怒鳴られたり、暴力を振るわれたりそれだけで気が滅入ってしまうし、信頼関係が築けないと看護することのむなしさや無力感、絶望を感じてしまう事等、様々な職務ストレスにさらされる。

対人サービスの職種はすべて感情労働者であるといわれる。成人の看護場面で看護師が経験する感情労働についての報告はあるが、これまで小児看護における看護師の感情労働についての領域の報告は見当たらない。小児看護の現場における感情労働を分析し看護者が行う感情管理を明らかにすることは小児看護の現場でとまどっている看護師にとっては「共通に体験している」と認識することが今後のかわりにおいてストレスを表面化させることになり有益である。

そこで、看護師個々の体験から小児看護の場面で看護師が体験する感情労働とその対処方法について明らかにし、小児科看護師のストレスについて考察する。

II 研究目的

- 1) 感情を抑制し感情管理を必要とした場面を明らかにする
- 2) 感情管理を行うため看護者はどのような対処を行うのか検討する。

<用語の定義>

感情労働：患者と関わることで様々な感情にさらされ、感情が労働の大きな要素となっている。対人サービスの職種はすべて感情労働者である。²⁾

感情管理：自分の感情をコントロールすることを感情管理とする。患者と関わることで様々な感情にさらされ、感情的にほとんど動ずることなくてきぱきと仕事をこなすことをいう

III 研究方法

- 1) 調査期間：平成18年8月～9月
- 2) 対象：小児看護を実践している病棟看護師 6名 内訳 1年目・2年目・3年目・プリセプター・6年目以上・副師長からそれぞれ1名のスタッフにインタビューを依頼する。
- 3) データ収集方法：半構成的面接法により病棟以外の調査者（MSW）がデータ収集を行い、承諾を得て録音する。質問内容は看護師が患児・付き添い家族との関わりの中で
(1) 自分の感情を抑えた経験はあるか。つらいと感じた経験はあるか。(2) 看護ケアの提供を困難に感じた場面はあるか。(3) (1)(2)の場合どの様に対処したか。
- 4) 分析方法：インタビュー内容を逐語録とした後、研究者間で意味内容のラベルを作成し類似性で分類する。
- 5) 倫理的配慮
信州大学医学部附属病院看護部の看護研究倫理委員会で承認を得た。被験者には研究の趣旨を説明し研究参加は自由意志であること、途中で中止するのは自由であり、得られたデータは研究の目的以外では使用しないこと、研究終了後はデータを破棄し個人のプライバシーを守ることを説明し書面で同意を得た。また許可が得られた場合のみ録音した。

IV 結果 (表1)

自分の感情を抑えた・ つらい経験	ケアの提供に困難を感じた 経験
<ul style="list-style-type: none"> ・常に批判的な視線にさらされる。家族の目が怖くて緊張する(12) ・今までの自分の看護経験が否定され、自信が持てない。他の看護師と比較される。家族への対応の難しさ(5) ・クレームが直接自分のところに来ない。師長、同僚からクレームの情報が入る(4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な看護ケアを母が行ってしまいさせてもらえない。(16) ・これまでの手順や経験が生かせない(8) ・育児と看護ケアの区別ができにくい。家族と患児の間に入りにくい。(4) ・相手の希望する時間に合わせなければならない。(3)

1、自分の感情を抑えた経験・つらいと感じた経験 (3つのカテゴリーに分類)

1) 常に批判的な視線にさらされる。家族の目が恐くて緊張する(12ラベル)。

「小児看護に携わったことがあるかと質問される」

「母親は看護師の行うことをずっと見ている」

2) 今までの自分の看護経験が否定され、自信が持てない。他の看護師と比較される。

家族対応の難しさがある。(5ラベル)

「今までの経験がリセットされた感じ」「患児に拒否され、名指しであの人が嫌だといわれた」

「自分の看護技術が否定され、自信をなくす」

3) 直接クレームが自分のところに来ない(4ラベル)

「直接自分に言われるのではなく師長、同僚を通して自分への指摘を知るとショック」であった。

2、ケアの提供に困難を感じた経験 (4つのカテゴリーに分類)

1) 必要な看護ケアをさせてもらえない(16ラベル)

「自分が一番わかっているからと母親が行う」

「状態が悪いと家族がぴりぴりしてケアを拒否する」

2) これまでの手順や経験が生かせない(8ラベル)

「子ども一人ひとりに合った検温のしかた、やり方がある」

3) 育児と看護ケアの区別ができにくい(4ラベル)

「母のすべき仕事に使われてしまう」

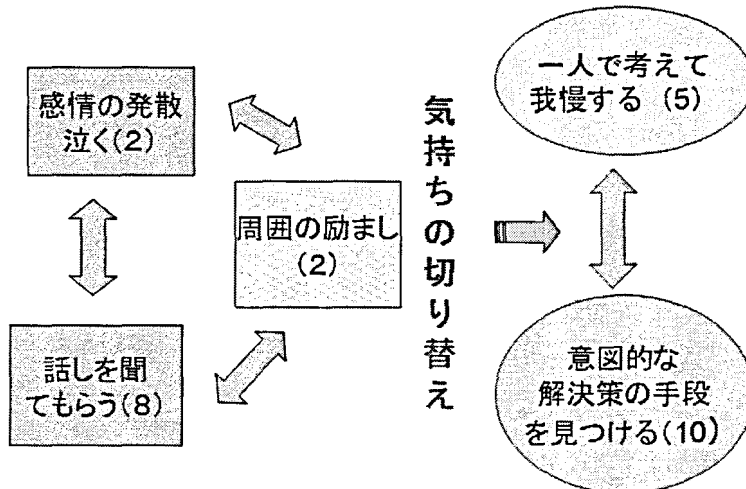
「各家族のやり方考え方（育児方針）がある」

4) 相手の希望する時間にあわせなければならない（3ラベル）

「この時間にと言われた時間にいけないと母親の機嫌が悪くなり、やりにくくなる」

3、対処方法：対処方法として挙げられた内容は5項目に分類できた（図1）

図1 対処方法



1) 感情の発散（2ラベル）

「休憩室で泣いて笑っていくしかない」「上の人につらさを訴えて思い切り泣いた」。

2) 話を聞いてもらう（8ラベル）

「仕事が終わって奥の休憩室で話す」「話して気持ちをすっきりさせる」「プリセプター・先輩・師長に聞いてもらう」。

3) 周囲の支え（2ラベル）

「家族の励まし」「同僚が夕飯をドアノブにかけてくれてあった」

4) 一人で考えて我慢する（5ラベル）

「深く考えてしまうことがあるので友達に電話をしたり、紙に書いて次の日に考えるようにした」「小さいストレスは自分の中で解消する。」「あまり気にしないようにする」

5) 意図的な解決策の手段を見つけて対処（ラベル数10）

「判らないこと、初めてのことは調べて望む。緊張してできなければ勉強し経験をつむようにした」

「母親とコミュニケーションをとるようにして母の気持ちや考えを理解するようにした」

「患児に精一杯関わり、愛情を注いだ」「母親がいないときにやれることはやってしまうよう

にした」

V 考察

小児看護師の日常の看護ケアは患児・家族から向けられる感情が大きく影響する。常に親の目があるため看護師には緊張があり必要な観察や看護ケアを行う時の感情労働は大きいと言える。ケアをする中で患児に拒否され、親から不安に思われているとわかると、自分の看護技術に自信が持てなくなりストレスが生じている。このような時、自分の感情を抑えつつ、相手の立場に立って考えることで気持ちの切り替えができ対処することができるようになる。

また、親と患児双方の信頼を得て行くためには相手に合わせた時間にそれぞれのやり方に合わせて看護ケアを提供することが行われている。過去の経験があっても、相手の信頼を得る手段とはならないため看護ケアを通して信頼関係を築くことが重要である。

相手の感情にさらされ、ストレスを感じている時にはストレスを発散させるため、話に耳を傾け、気持ちの切り替えを行うために一緒に感情を整理し、対処方法を考えてくれる同僚や先輩の存在、看護チームの雰囲気感情管理を容易にすると考えられた。

VI 結論

小児看護では、親と子どもへの感情労働は多く存在する。それらは周囲の同僚の支えと、日常の看護場面でケアリングを行い前向きに取り組むことが信頼を得ることに繋がり、感情管理を容易にする。ストレスや感情管理の方法は経験によって相違があると推測されるため、今後の課題にして検討していきたい。

VII 引用文献・参考文献

- 1) A. R. ホックシールド著 石川順准・室伏亜希訳： 管理される心—感情が商品になるとき—, 世界思想社, 2006.
- 2) 武井麻子著：感情と看護『人とのかわりを職業とすることの意味』, 第1版7刷, p 40-42, 2004年9月.
- 3) 井田亜希子他：小児看護領域における家族看護学研究の動向—5年間の変化と受容過程に置ける家族看護学研究の動向—, 川崎市立看護短期大学紀要, 5巻, 1号, p 1-9, 2000